

TSG (Technical Study Group) 2種

対象試合：令和7年度中体連サッカー大会決勝 会場：遠軽球技場

日時：2025年7月5日(土) 13:00 KICKOFF

文責：新井田(北見緑陵)・関口(網走桂陽)

[大会レギュレーション]

- ・KO トーナメント方式、30分ハーフ
- ・本大会優勝チームが代表校となり、全道大会に進出する。

[対戦カード] 潮見・紋別・佐呂間 vs FC BIHORO

[分析]

①両チーム特徴

紋別・潮見・佐呂間	前線の2トップにボールを送り込み、中央突破やサイドに展開して攻撃する。
FC BIHORO	サイドを起点としたスピーディーな攻撃を仕掛ける。DFラインの安定感もあり、CBを中心にブロックを築いて守る。センターラインの選手は足元の技術に優れ、展開力がある。

②スタッツ

潮見・紋別・佐呂間		0	1 2	FC BIHORO	
0		0		3	
前半	後半	項目		前半	後半
0	0	スコア		1	2
0	1	シュート		9	8
1	3	FK/間FK		6	2
0	0	オフサイド		1	0
1	0	GK		0	0
0	3	CK		0	3
得点経過		'19 ⑥→④ (③S) '26 ⑦→⑦S '44 ×⑦S			

③成果

紋別潮見		美幌 UFO
相手の守備ラインの背後にボールを送りつつ、ボールを細かくつなぎ、ゴールにせまる形を作ることができた。また、3人目の動きも使いつつ、中央の密集した地帯をコンビネーションで打開する局面もあった。 時にはロングボールを多用し、相手のライン全体を下げさせる攻撃をしたり、相手の状況を見ながら攻撃をすることがある程度できていた。	攻撃	攻撃の優先順位となる相手の守備ラインの背後にボールを集めることで、全体的に相手のハーフで攻撃をすることができた。サイドの7番の推進力を活かしつつ、背後に飛び出していく選手が多かったため、ライン間あるいは足元でボールを受けられる状況を作り出した。サイド→中央、中央→サイドとボールを出し入れしながら、相手のゴールに迫ったため、得点のバリエーションが多く、相手に的を絞らせない攻撃が目立った。
中央突破は許さないよう、激しいプレッシングで相手センターハーフに前向きの状態を作らせないプレーが随所に見えた。DFラインを中心に、チャレンジアンドカバーを繰り返していた。また、相手のサイドからの切り込みに対して中央を固め、フリーの状態シュートチャンスを作らせなかった場面もあった。また、GKと連携し、シュートコースを限定するなどの場面も随所にあった。	守備	前線からのプレスが機能し、潮見のビルドアップを停滞させた。CB→ボランチ間で相手の自由を奪うプレッシングをしたことで、サイドにボールを追い込み、連動してサイドの選手がビルドアップの出口を塞ぎ、ボールを前に運ばせなかった。また、自陣での粘り強い守備もあり、ゴールまでは終結し中央を固め、容易にペナルティエリアへ侵入させない場面が目立った。

④課題

紋別潮見		美幌 UFO
<p>中央の選手へのプレッシングが厳しい時に CB、あるいはサイドに位置取る選手のサポートの質が高まれば、ボールを保持しながら、前進することができると感じた。具体的には CB が深さを取り、サイドが幅を取るなどの動きが必要と感じた。また、GK がビルドアップに参加することで、相手前線 2 枚に対して、数的有利となれるはずである。</p>	<p>攻撃</p>	<p>GK を含めた低い位置からのビルドアップをしていく上で、それぞれの選手の立ち位置がより優位性のある位置に立つことができると安定したビルドアップにつながると感じた。</p> <p>相手 FW、ミドルサードに位置するセンターハーフおよびサイドハーフの位置どりを見ながら、サイド・中央の選手が適切な位置どり、タイミングでボールを受け、局面で数的優位を作ることが安定的なビルドアップにつながるだろう。</p>
<p>フリーの状態でクロスを上げさせないのが前提ではあるが、上げられてしまった場合は、GK との連携、DF ラインがマーカールとボールを同一視する必要がある。サイドに展開された場合の対処（CB がカバーに行く、ボランチはどの立ち位置を取るか、逆サイドの SB の動きなど）を原則化するのも 1 つだと感じた。</p> <p>また、こぼれ球を回収される場面が多く、相手の 2 次攻撃を防ぎ切れなかった部分もあった。</p>	<p>守備</p>	<p>中盤の守備において、攻→守に切り替わりの際に、どの選手が 1stDF・2ndDF になり、ボールホルダーへアプローチに行くか、あるいはボール奪取に行くかという原則を定めることで、連動したプレッシングが可能である。</p>

④総括

決勝戦にふさわしい、高い強度でのプレーが全体的に目立ったゲームとなった。プレーの原則に則り、相手にとって、嫌なプレーをする選手が多く、個人戦術のレベルが高い印象を受けた。上のカテゴリーに上がっていく中で、オン時のプレーの質を向上させることはもとより、オフ時のプレーの質を高めていくことは、より複雑化していくグループ戦術やチーム戦術を実行するために重要である。個の力で局面を打開する能力をどのようにグループでの攻撃に落とし込み、ゴールに迫っていくか、あるいは厚みとスピードのある攻撃を複数の選手、あるいはチームとしてどのように守っていくかを選手それぞれに考えさせることが中高の接続の中で指導者が意識すべき点であることを再認識した。